

JASIS

NEWS

No. 75

2025/3/28

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

第36回日本インテリア学会大会（北陸・高岡）を終えて

学会会長 横山勝樹（女子美術大学教授）

昨年11月に第36回大会（北陸・高岡）が盛会裡に終了しました。大会長の棒田邦夫先生ならびに実行委員長の長山信一先生はじめご尽力を賜った北陸支部の皆さまに改めて御礼申し上げます。昨年に引き続き対面式開催となりましたが、研究発表会での活発な質疑応答はもとより、参加された会員の皆さまは、見学会、研究交流懇親会、記念講演会において有意義な時間を過ごされたと思います。また卒業作品展もオンラインで同時開催されました。全国から優秀な作品が集まり、今回は受賞者の数も増えました。これらの詳細については本報の報告をご覧ください。

ところで近年の国際学会では特にエクスカージョンの充実ぶりが際立ちます。観光目的で学会に出張するわけではありませんが、興味を共有するグループで同じ場所を訪れて、その体験について意見交換をすることも学会ならではの活動だと思います。富山はニューヨークタイムズ紙による「2025年に行くべき場所52」の一つに選ばれました。高岡も観光資源が豊富な街ですが、本大会では高岡の誇る伝統工芸品である鋳物の製造現場なども見学させてもらいました。そのうちの一つでカフェレストランも備える能作の瀟洒な新社屋は、沢山の来館者で賑わっていました。社長の能作千春さんには、記念講演会でもお話を頂きました。私もディスカッサントを引き受けてましたので、彼女の本（『つなぐー100年企業5代目社長の葛藤と挑戦』）を事前に読んでいましたが、実際に現場を訪れ、さらに講演も拝聴して大変感銘を受けました。

能作さんは、もともとアパレル通販誌の編集をされていたのですが、その職場でたまたま実家が作っている鋳物製品が話題になり家業を見直す機会が訪れたのだそうです。そこで故郷に帰り父親の会社に入社され一昨年には社長に就任されました。その間、職人の経験がないこと、仕事と家庭の両立などでさまざまな葛藤があったとも書かれていますが、地域が認めてくれる製品を作れば地域の人がその製品を自然と地域外に広めてくれる、という信念のもとで地域とのつながりを重視した活動をされてきました。見学会では職人の方が直接私たちに鋳物製造の工程を分かりやすく説明してくれました。鋳物製作体験も催されていて多くの老若男女が参加されていましたし、カフェも大変な賑わいでした。これらは同社が取組む産業観光の一環としての日常的な営みであるそうです。製造業のみならず観光業、飲食業、そして自ら提唱された「錫婚式」のブライダル産業などを通して地域とつながりを広めておられます。職人たちの仕事をプロダクトアウトとすれば、ご自身の役割は消費者のニーズから考えるマーケットインであり、その両輪で伝統工芸を未来につなげようとされています。日本各地の伝統工芸は時代の変化にさらされて絶滅の危機と言われることも多いのですが、能作は今では日本各地に直営店を営まれています。その挑戦から私たちも学ぶべきことが多いと思いました。

さて今年は東京での大会開催が予定されています。本会については関東支部長の高柳英明先生はじめ支部の皆さまが着々と準備を進めておられます。皆さまと共に大会での学術成果を上げることで、日本インテリア学会の活動をさらに盛り上げていきたいと思っております。会員の皆さま本年もどうぞ宜しくお願い致します。

■ 日本インテリア学会第36回大会（北陸・高岡）開催報告

実行委員長 長山信一（富山大学名誉教授）

JASIS 第36回大会（北陸・高岡）は、2024年11月9日（土）、10日（日）に北陸支部の富山大学芸術文化学部・高岡キャンパスで開催した。大会はコロナに配慮して、昨年同様の対面開催を基軸に、作品展はWeb開催とした。北陸支部開催の経緯は、令和5年度総会で上野先生から北陸支部での大会開催を打診されて、近年の大会開催の経緯を知り承諾した。北陸支部会員は少なく、役割分担を明確にし、プロジェクトチームで大会開催を目指した。

会場選定は、過去3回は金沢で開催して来たが、今回は実動会員5人の内4人が富山県民で、内2人が富山大学芸術文化学部教員とOBなので、富山大学・高岡キャンパスでの開催とした。会場は車社会で公共交通の便は悪いが、コンパクトで設備は充実し、大会開催には適していた。また、幸い大会当日は好天に恵まれ、紅葉の美しい日でした。

初日の「見学会」は“インテリアの輝き”をテーマに、11月9日（土）12時半に北陸新幹線・新高岡駅に集合し、バスで出発した。見学先は大学の地域連携でお世話になった所です。最初に金屋町の高岡市鋳物資料館を訪れ、高岡銅器産業の歴史や伝統の資料・技法等を見学した。2番目に高岡銅器団地の（株）平和合金を訪れ、銅器産業の作業の隅々まで見学させて頂き大変勉強になった。3番目に（株）能作を尋ねた。休業日に実演見学を受入れて頂き感謝した。透明な原型保管庫・工場のインテリア・製造工程は洗練されており、ショールームやショップは大人気でした。4番目に富山県有形文化財で1853年建築の入道家住宅を訪れた。散居村最大級吾妻建民家で、入道康秋夫妻に出迎えて頂き、屋敷林・建屋内部や設えを

見学した。その後、黄昏の中を懇親会場に向かった。「研究交流懇親会」は、18時～20時に高岡駅前ビル2階“カジュアルダイニングBON”で開催した。ゲストに講師で学友の「加賀象嵌の人間国宝」中川衛氏を招いた。学会長・大会長・ゲストの挨拶の後、全員が自己紹介し、懇親会は大変盛り上がった。

大会「開会式」は11月10日（日）9時より講堂で行い、学会長・大会長・実行委員長の順に挨拶した。9時45分～11時45分に「研究発表会（第1セッション・第2セッション）」を開催。11時45分～13時に「昼食・理事会」を実施。13時～14時に「研究発表会（第3セッション）」を開催した。「記念講演会」は“インテリアの輝き”をテーマに、14時～16時に講堂で開催した。最初に名誉大会長の武山良三氏（富山大学副学長）が挨拶し、学会長・大会長の挨拶の後、講演会を開始した。第1講演者（株）能作社長の能作千春氏は、産業観光を標榜し「革新的な工場経営」・「モノからコトへの挑戦」・「日本から世界市場への挑戦」など、高岡銅器産業のホープに相応しい講演でした。第2講演者「加賀象嵌の人間国宝」中川衛氏はPanasonicのデザイナーでしたが、「加賀象嵌の鍔や鍔」の魅力に開眼し、高橋介州氏に師事して加賀象嵌（平象嵌～重ね象嵌）の技法を修得し、人間国宝に認定された。金沢美術工芸大学名誉教授で、象嵌の歴史を辿り中近東やトルコに出掛けた話と共に、数々の作品を解説し、発想の原点を解説した。彼の講演者は横山勝樹学会長で、能作氏・中川氏と共に鼎談を行った。話題は多岐にわたり、会場の質問にも応えつつ活発な議論で盛り上がり、有意義な講演会となった。「閉会式」は、16時から始まり、作品展の入賞者や研究発表優秀者の表彰を行い、最後に学会長・大会長・実行委員会メンバーの挨拶で閉会した。

今回のJASIS第36回大会（北陸・高岡）が開催できたのも、学会長を初めご参加頂いた学会員の皆様、役員の皆様のご理解とご協力の賜物であると感謝しています。最後に北陸支部会員各位の協力と努力に感謝します。



大会記録

11月9日（土）：大会1日目

見学会

佐伯高基（富山県立高岡工芸高等学校）

集合場所の新高岡駅を定刻12：30に出発し、高岡鋳物資料館・平和合金・能作・入道家住宅の順で見学をしました。時期的に肌寒い日でしたが、晴れていたおかげで順調に回ることができました。この地域はアルミ鋳物によるアルミ産業が盛んな地域でもあり、アルミ素材の面白さ、工夫に接することのできた見学会であったようです。

研究交流懇親会

渡邊雅志（富山大学）

研究交流懇親会は、高岡市駅前にあるレトロモダンな洋食店「カジュアルダイニングBON」にて開催しました。学会宿泊用として推奨した駅前のホテルと懇親会会場を徒歩3分以内にまとめました。当日は12：30～17：40まで見学会が開催され、その流れのまま参加者をホテルまでご案内し、懇親会前に手荷物をホテルに預けることができるなど参加者のご負担にならないよう配慮いたしました。

実行委員長の長山信一先生の司会にて開会し、学会長の横山勝樹先生のご挨拶、大会長の棒田邦夫先生のご挨拶の後、横山学会長の乾杯で始まりました。全国からいらっしゃった約50名の参加者は年齢幅も広く、世代を超えた活気ある歓談が各テーブルから聞こえてきました。

最後に、次年度関東大会から関東支部長の高柳英明先生のご挨拶をいただき、あっという間にくるであろう次年度大会に思いを馳せつつ、「インテリア」が繋げる世代と時代を超えた交流は、いつの日にも変わりなく語り合える魅力があると確認できた、北陸・高岡大会の研究交流懇親会となりました。



横山勝樹学会長のご挨拶



研究交流懇親会の様子

11月10日（日）：大会2日目

開会式、研究発表会

棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

開会にあたり長山信一実行委員長が開会のご挨拶を行い、実行委員長の司会進行によって棒田邦夫大会長、続いて横山勝樹学会長による開会のご挨拶をいただきました。開会式には、今大会に参加いただいた約70名の方にご出席いただきました。

続いて、研究発表会が3会場に分かれて午前5セッション、午後3セッション、合計8セッションで対面形式にて開催されました。各発表の詳細につきましては各座長による講評をご覧ください。

記念講演会

実行委員会・幹事 川本聖一（富山国際大学）

「記念講演会」は「インテリアの輝き」をテーマに、14時～16時に富山大学・高岡キャンパスの講堂で開催された。最初に名誉大会長の武山良三氏（富山大学副学長）が挨拶し、高岡キャンパスの設立の経緯や、日本インテリア学会がフルスペックの大会開催を実施していることに敬意を示した。会長・大会長の挨拶の後、講演会が開始された。

第1講演者（株）能作の能作千春社長は、産業観光を標榜し「革新的な工場経営」・「モノからコトへの挑戦」・「日本から世界市場への挑戦」など、高岡銅器産業の若手ホープに相応しく、様々な挑戦を行なっていることを詳しく講演をしていただいた。また、初日の（株）能作の見学会「産業観光（FACTORY TOUR）」では、休業日にかかわらず、実演の見学を受け入れて頂いた。ここでは、「透明な原型保管庫・工場のインテリア・製造工程の見学コース」は洗練されており見ごたえのあるものだった。参加者が最後に訪れたショールームやショップは大人気であった。講演会ではその見学会や多様な事業の映像を交えて、大変盛り上がった。

第2講演者の「加賀象嵌の人間国宝」中川衛氏は、元はPanasonicのデザイナーであった。その後、「加賀象嵌の鍔や鍔」の魅力に開眼して、高橋介州氏に師事した。そこでは加賀象嵌（平象嵌～重ね象嵌）の技法を修得して、人間国宝に認定された人物である。氏は金沢美術工芸大学名誉教授でもあり、象嵌の歴史を辿り中近東やトルコに出掛けた話と共に、数々の作品を解説し、発想の原点についても解説された。

第3講演は“鼎談”で、横山勝樹学会長と前出の講演者、能作千春社長と人間国宝・中川衛氏の3人で、学会長の司会により“鼎談”を行った。議題は多岐にわたり、会場からも様々な質問があり、活発な議論で盛り上がった。大変有意義な講演会となった。

表彰式、閉会式

実行委員長 長山 信一（富山大学名誉教授）

16時より、実行委員長の司会で閉会式が開催された。

最初に表彰委員会の高月純子委員長より、研究発表大会で理事による投票の結果、以下の通り3名の方々に令和6年度日本インテリア学会第36回大会「学生優秀発表賞」の授与が決定したこと。および、令和6年度日本インテリア学会第31回卒業作品展[受賞作品]：最優秀作品賞(2作品)、優秀作品賞(6作品)、特別賞(4作品)高等学校優秀賞(2作品)が決定したことが報告された。その後、受賞者代表に学会長より賞状が授与された。最後に学会長・大会長・実行委員会メンバーの挨拶で閉会した。

- ◎令和6年度日本インテリア学会 [学生優秀発表賞]
 - 「高齢者と留学生の異世代居住に関する基礎的研究」
張 永旭 (文化学園大学)、曾根 里子
 - 「生理反応および感性評価に基づくアリーナ観客人流の混雑評価」
山本 遼佳 (東京都市大学)、高柳 英明他5名
 - 「小学校における余裕教室を活用した学習環境に関する研究」
小池 直哉 (千葉工業大学)、渡森 史郎、橋本 都子
- ◎令和6年度日本インテリア学会 第31回 卒業作品展 [受賞作品]
 - ・最優秀作品賞 (2作品)
 - 「重度障碍児の旅」
松山 こと子 (芝浦工業大学 建築学部建築学科APコース)
 - 「Blind Chair」(ブラインド チェア)
黒木 星治 (名古屋芸術大学 芸術学部芸術学科 デザイン領域・スペースデザインコース)
 - ・優秀作品賞 (6作品)
 - 「立体記紀ー日本神話における物語の空間化ー」
杉浦 康晟 (愛知淑徳大学 創造表現学部 創造表現学科 建築・インテリアデザイン専攻)
 - 「とおりみち 月島に点在するアートギャラリー・ホテル」
若杉 咲奈 (共立女子大学 家政学部 建築・デザイン学科 建築コース)
 - 「時間のイメージー時間の空間化を通じた複合施設の提案」
松永 萌子 (東京理科大学 工学部 建築学科)
 - 「メディウムが滲む」
加藤 優童 (名古屋工業大学 社会工学科 建築・デザイン分野)
 - 「ここ路ー際で交わる大小の足跡ー」
本間 しおり (日本大学 工学部 建築学科)
 - 「ASANOHA FURNITURE」
今村 亮介 (東京藝術大学大学院 美術研究科 デザイン専攻)
 - ・特別賞 (4作品)
 - 「GO-EN」
佐久間 千尋 (女子美術大学 芸術学部 デザイン・工芸学科 環境デザイン専攻)

「茅野の土・水・森と成長する場ー茅野市立永明小学校 永明中学校を 対象としたインテリアデザイン」

對島 綾音、鶴田 恵子 (相山女学園大学 生活科学部 生活環境デザイン学科 インテリア・プロダクト分野)

「都市のキャノピーー土木のアーバンインテリアとしての再解釈ー」

和田 健志 (広島工業大学 環境学部 建築デザイン学科)

「Fittari SHIBUYA SUKIMA PROJECT」

金 釉娜 (ICSカレッジオブアーツ インテリアデザイン専門課程 インテリアアーキテクチャ&デザイン科)

- ・高等学校優秀賞 (2作品)

「「村半」の模型」

川崎 美侑、下田 美空、森下 琉生 (岐阜県立高山工業高等学校 建築インテリア科)

「【保育交流】蜂と芋虫の音楽隊」

清水 美那、渡邊 虹幸 (千葉県立市川工業高等学校 インテリア科)

- ◎第31回卒業作品展 審査委員会

横山 勝樹 審査委員会委員長/日本インテリア学会会長

長山 信一 第36回大会 (北陸・高岡) 大会実行委員長

白鳥 洋子 第36回大会 (北陸・高岡) 大会実行委員

金子 裕行 教育研究部会長

高月 純子 表彰委員会委員長

■日本インテリア学会 第36回大会 (北陸・高岡) 研究発表講評

【住宅1】001~005

座長：曾根里子 (文化学園大学)

001 ヨーゼフ・フランクによる住宅作品に注目した研究である。本稿では、1927年に開催された住宅展覧会のヴァイセンホーフ・ジードルンクにおけるフランクの住宅作品について、文献をもとに、その特性を明らかにしている。外観の形態的特徴や、L字型ブロックを使用した構造、内壁のスチールスタッドフレーム、電気・ガスのエネルギーコンセプトなど、合理的で先進的なアイデアが取り入れられていたことが提示されている。今後の続報として、ウィーン・ヴェルクブンドジードルンクの考察とあわせた、フランクの住宅作品に関する総合的な分析が期待される。

002 ヨーゼフ・ホフマンの「Kubus」とル・コルビュジエの「LC2」のデザインの起点をチェスターフィールドチェアに置き、形態と機能を比較している。「Kubus」ではチェスターフィールドチェアから姿勢や快適性を受け継ぎつつ幾何学形態へ転換したこと、「LC2」では「Kubus」の幾何学形態を保ちつつ骨組みとクッションの

構成を外に出したことなど、デザインプロセスと背景から、共通点と変化を明示している。時代の要請を受けたデザイナーが、椅子の形態や機能をどのように選択し形作るのかという視点とともに、「Kubus」を近代の椅子のデザインの変曲点と位置づけた点も興味深い。

003 20世紀後期の日本のインテリア史について、2つのインテリアブームの視点から概観した報告である。第1次インテリアブームは戦後の住宅供給とイス式生活への転換、第2次インテリアブームは質から量への転換と住空間への普及が進んだ時期であり、関連する業界団体や職能団体、資格制度、学会等が相次いで設立された経緯とともに、建材や設備の開発、家具業界の変遷についても述べられている。デザイナー寄りの観点にとどまらず、より俯瞰的にインテリア史を捉える研究として、今後も日本のインテリア史の特質の解明に寄与することが期待される。

004 コロマン・モーザーとヨーゼフ・ホフマンの椅子デザインについて、同時代の建築家による椅子との比較を行った研究である。両者の椅子デザインの特徴と、ヴァーグナー、オルブリヒ、ロース、マッキントッシュによる椅子との比較・考察により、デザインの同時性や相互の影響関係を示し、同時代の椅子にみられる共通項を明らかにしている。19世紀から20世紀にかけて、建築家たちが影響し合い、伝統的な様式から簡素なデザインへと移行したことが指摘されており、前報（第35回大会）とあわせて、過去の様式と現代のデザインとの間における位置づけを明確化している。

005 戦後に建設された半円形校舎に関する希少な報告である。全国初の半円形校舎の事例である鹿屋市立鹿屋小学校を対象として、文献や新聞記事から、その成立経緯と評価を明らかにしている。既に建設されていた円形校舎を参照しつつ、その欠点部分を克服すべく計画された経緯や、竣工後に挙げられた改善点・改良点について整理されており、貴重な資料となっている。また、当時の報道資料においてその珍しさや利点が取り上げられ、理想的校舎として報じられた様子も示されており興味深い。今後の半円形校舎の展開に関する続報も期待される。

【計画1】 006~009

座長：黒田智子（武庫川女子大学）

最初の2題は良好な居住環境のために今日的な問題についての知見を得ようとするものである。最初の発表は、言語・文化的適応が難しく日本を離れていく留学生が多い現実に問題意識を置く。賃貸料が比較的安い集合住宅において、若い留学生が高齢者と交流するための環境づくりを目指して、相互が相手に求める希望調査をしている。第二の発表は、すでにある環境に比較的小さな規模で手を加えて、その環境をより豊かにするための可能性を検討している。景観の描画は生成AIを用いており今後の展開が注目される。

第3の発表は、住宅のリノベーションにおいて、床の

間と仏間との形式的（視覚的）変化と用途の変化という2つの視点から18事例を詳しく調査・分析したものである。床の間の現況の一端を伺うことができた。

第4の発表は、これまでに発表された「インテリア美学」の各論編の「装飾」を取り上げ、近代建築における装飾の捉え方を確認したうえで、その表れ方を「無装飾」と「過装飾」、「美」と「醜」など両極を決めてそこに実際の装飾を位置づける試みである。そこに入らざるを得ない主観をどう扱うのか、思考のモデルとしての可能性など、興味深い。

【計画2】 010~014

座長：高橋正樹（文化学園大学）

010 家具産業におけるリソーシング系モデルの検討に関する研究である。具体的には、家具の製造、流通、販売、および廃棄物回収等を手掛ける家具業界各社が「家具インテリア リサイクル&リニュー協議会（R&R協議会）」を発足させ、リソーシング系の流れを繋ぐ事業について検討を行った。本研究では、現状分析として廃棄物収集とその処理方法、廃棄物処理法に基づく業界処理の可能性、および退蔵物の実態調査が報告された。また、家具業界におけるリソーシング事業の実態や、スプリングマットレスの回収に関する実証実験についても報告された。その結果、大きなCO₂削減効果が確認された。今後のさらなる展開に期待したい。

011 産後ケア施設における利用状況と空間構成との関係に関する研究である。具体的には、病院や助産所の利用状況および空間構成を整理し、施設類型ごとに応じた空間計画の基礎資料を作成することを目的としている。助産所と病院を各2施設、計4施設を対象に、施設管理者へのヒアリング調査、図面収集、写真撮影等を実施した。その結果、事業開始の理由として分娩数減少による空きベッドの活用が確認された。また、産後ケアに使用する居室については、産後ケア利用者以外との領域分けが必要とされ、洋室に対するニーズが見られた。一方で、共用スペースの積極的な利用は確認されなかった。今後のさらなる展開に期待したい。

012 高齢者施設の環境の質の向上を目指し、介護施設職員の情報共有に関する考察を行った研究である。具体的には、高齢者居住施設における知識共有および創造の「場」の実態を明らかにすることを目的としている。知識共有や創造に関するSECIモデルを援用し、施設職員へのヒアリング調査を実施した。調査対象は、神奈川県にある特別養護老人ホーム2施設である。調査の結果、オンラインシステムやインカムの利用によって形成される情報共有の場は、場所を選ばない利点がある一方で、「ながら」の参加や「思い」の共有が難しいことが明らかになった。今後のさらなる研究に期待したい。

013 スポーツ施設では、試合の開始や終了、またはその前後の入退場時に局所的な混雑や人流交差による停滞・滞留が発生する。従来の歩行空間における歩きやす

さの指標は、こうしたスポーツ施設設計に適用するのが難しい。このため、観客の人流に関する生体情報や、快・不快を示す被験者評価に基づく空間計画およびその評価方法が必要である。本研究では、観客の行動をカメラ解析およびバイタルセンシングによって計測し、混雑密度等との関係を検討した。データは、屋内スポーツ施設（Tアリーナ）で行われたスポーツイベントを対象に収集した。その結果、快・不快の感覚が強いほど生体データと群衆密度に強い相関が見られることが明らかになった。今後のさらなる展開に期待したい。

014 インスタグラムに投稿されたカフェの画像をもとに、どのようなカフェが好まれる傾向にあるのか、また人気とされるカフェにはどのような特徴があるのかを考察した研究である。調査は、大分県内で人気とされるカフェ24店舗を対象に行った。人気の指標として、インスタグラムのランキングを採用した。その結果、床と内壁の両方に木材を使用し、色合いをブラウンやクリームなど低明度の暖色系にすることで、彩度が低くても空間に暗い印象を与えないことが明らかになった。また、照明の色を電球色にすることで温かみのある雰囲気演出し、空間に重厚感を与えていることがわかった。今後のさらなる研究の展開に期待したい。

【計画3】 015～019

座長：高柳英明（東京都市大学）

015 労働形態・ライフスタイルの多様化を背景にサードプレイスの重要性が昨今見出されているが、特にこの研究では子どもの「第三の居場所」について着目し実証実験に基づいてその有用性にせまるものである。特に児童施設では、学び・遊戯・食事等を目の行き届く範囲で行わなければならない、そうした観点から、空間利用の自由度と保育・看取の両立が特徴的な計画視座につながるため今後の研究推進に期待する。

016 本研究は、映像メディアとそれを視聴するテレビ・スマートフォン等の文明の利器による恩恵は計り知れないが、同時に視力低下へのインテリア科学の視点から実態を明らかにしている。同時に外遊び等の有用性、庭等の屋外環境と居室の関係から、本研究は親の「視育」とともに、現代のライフスタイルに合わせた居住空間とその計画へのバックキャストが急務である警鐘を的確に示している。

017 016の発表と連続しているが、特に本研究ではテレビとその廻りの家具レイアウトについて言及している。液晶・有機EL等の進歩と低価格化により、テレビ画面が益々巨大化しているが、老眼・弱視等には都合がよい一方、視力低下を来さない十分な観視距離を確保するには国内の住宅事情特にリビングルームの寸法は十分検討されていないと思われる。この観点で本研究は今後の計画支援に寄与できるものと思われる。

018 夏・冬の長期休暇や連休等により、子どもの睡眠時間は変動しやすく、人体のサーカディアン・リズムを

好ましく保つのが難しい。また学修進捗や友人間での人間関係等による悩みも、低学年になればなるほど自分自身で克服できる幅が小さくなりがちである。本研究は小学生児童の睡眠時間にかかる実態アンケートに基づき、その要因をまず明示している点が有用である。その知見から、インテリア空間の計画支援につなげたり、就寝空間の光・音等の環境トリートメントに技術移転が大いに期待できるのではないかとと思われる。

019 本研究は、従来の小学校教育課程の施設計画では扱いきれない「特別教育支援」「不登校是正」「メンタルケア」等に配慮するアプローチを示していると思われる。余裕教室は得てして看取・教育に最適な場所・位置・広さを確保できない場合が多いが、昨今の高齢少子傾向から、現況教室・準備室等の積極的な利活用方針を示すだけのリサーチインパクトを持っているのではなからうか。またこうした研究は長期戦であるため、今後の研究余地・後続研究に期待を寄せるものである。

【計画4】 020～022

座長：川本聖一（富山国際大学）

020 この研究の目的は、色覚異常のある児童・生徒の学校現場での困り感を把握し、それに対する効果的な支援方法を明らかにすることである。研究手法は、色覚異常当事者に対するアンケート調査であり、サンプル数は28である。調査の結果、学習面においては「図画工作・美術で絵を描いたり作品を作ったりするときの色使いにこまる」、生活面においては、バスや電車の路線図がわかりにくいなどの結果を得ている。また、色覚異常について教員に知ってほしい事項としては、「色覚異常がある人が一般的にどんな場面で困るか」が最も多くの人を選択しているという結果であった。まとめとして、「すべての教員が正しく色覚異常とカラーユニバーサルデザインを理解する機会を設けることが求められる」としている。今後は「理解する機会」の設け方についての言及に期待したい。

021 この研究は、高齢者がウェルビーイングにつながるくらしをどの程度行っているかについての基礎資料の作成である。研究手法はアンケート調査であり、アンケートの分析対象は70歳代男女548人である。ウェルビーイングを「からだ」、「こころ」、「交流」の3要素に分解し、くらしの行動範囲を「住まい」、「周辺地域」、「資産」に分類している。得た知見は、「食」は「からだ」の基礎であるという認識と「住まいの愛着」が「こころ」のウェルビーイングにつながるということなどである。「周辺地域」における「自然」、「困った時に頼りになる家族」も重要なウェルビーイングの要素となるということである。筆者も今後の課題で言及しているが、今後は、住まい・周辺地域・資産という側面で考えた時、ウェルビーイングが向上するような「仕掛け」をこのようなアンケート調査結果からどのように創出していくかが大きな課題となる。

022 この研究の目的は「賑わいに関する研究」とは何かを明示することであると推察する。そのために、本稿では、40件の資料文献について、その研究における「賑わい」の「場所」とそこにいる「人間集合」の2項目について整理している。整理した結果、場所についてはある程度広範囲、人間集合は集合体・群衆レベルが多いということであった。この結果は至極当然なことと思われる。この結果をもとに筆者は、40件の資料文献においては「主観的な評価による賑わい研究がない」と結論づけている。ここで言う「主観的」とは「賑わいから受ける個人のストレス」のような事柄ということであるようだ。その方向で、今後は研究のテーマを明確にして、その観点で、既往研究の調査や「賑わい」に関する分析を行うことに期待する。

【教育】 023～024

座長：正岡さち（島根大学）

023 本研究は、地域の人々と協働して空き家のリノベーションを行い、それを実践的な教育に活かす取り組みに関する研究である2018年度から始まった活動で、今年度は2022～2023年度に行った3つのプロジェクトをまとめて報告している。学生が建設プロジェクトを体験することで論理的思考だけでなく直観力や感性を高める教育効果がありえる、と結論づけている。実践研究として継続して行われているものであることから、今後、さらに検証することによってその効果が著者の実感としてだけでなく、エビデンスを持った形に結論づけられることが望まれる。

024 インテリア・建築分野の資格試験の製図試験の表記の詳細を明らかにし、より使用しやすい「インテリア製図通則」の制作を進めることを最終的な目的として研究を行っている。本研究では、各資格試験の教科書の表記内容について比較した結果を報告している。その結果、全体的には一致していたものの、詳細な内容についてはばらつきがあったことを明らかにしている。資格試験を受ける者にとっては、各試験における表記が一致していることは有益である。今後の研究の進展に期待するとともに、できるだけ早い時期に表記内容が統一されることが望まれる。

【人間工学】 025～029

座長：中村孝之（生活空間研究室）

025 住宅やオフィスの狭小空間において、2名の作業者が横並びに接続するテーブルで作業を行うシーンにおいて、テーブル高さの違いによるコミュニケーションの活性の度合いと個人作業の独立性の度合いを評価する研究である。本実験によるとテーブル段差が230mmでメタボールが千切れず独立作業に適しているとしている。またSD法に加え、EEGやEDAで生理データを計測しているが、作業や会話中は頭部の活動が多く頭皮脳波（EEG）データの読み取りが困難ではなかったかと推測する。今

後、人の配置やお互いの向き、各テーブルの位置やレイアウトによる違いなど、人の配置の可能性への評価も期待される。

026 都市の歩行空間において、人を乗せたパーソナルビークルが群衆を横切るとき、通行する群衆密度とパーソナルビークルの交差角度の違いによって、群衆がどのように回避するかを確認する実験である。移動するパーソナルビークルと群衆の進行方向の角度により、側方回避、前方回避、後方回避の傾向と歩行速度の変化が見られたと報告されている。現在実用化されている自動走行RTでは障害物があれば停止するが、多くの群衆を横切ろうとするなら、停止しては移動が難しいからこのように群衆に割り入っていく必要がある。基本的な人の動きを確認した上で、安全に走行するためのセンシングや制御方法の発展につながることを期待する。

027 ホタルの発光様態とミズクラゲの浮遊挙動をモニターで擬似的に再現し、疲労負荷実験によって映像を視聴によるリラクゼーション回復効果を計測する実験である。様々な生理データを取得しており、結果として各計測データを分析しているが、アミラーゼやEDA、EDGのデータによるリラクゼーション効果の比較と、まとめて書かれている効果の評価が一見矛盾しているように読み取れる点もあるため、これらのデータの相関の更なる分析、考察が必要であろう。データの傾向や有意な相関があれば、多くの計測装置の装着や唾液サンプリングなどの負荷をかけて多種のデータを取得しなくても効果の評価につながるのではないだろうか。今後、リラクゼーション効果の高い環境デザインの評価研究を進めることが期待される。

次の028[実験B]、029[実験A]は一連の研究であるが順番が逆であったため、029を先に報告した。本研究は、溺水事故の防止が期待される、浴槽レス浴室の寸法について擬似浴室で被験者実験したものである。

029 [実験A]浴槽レス浴室の平面寸法に関する実験である。介助なしの人が立位で入浴する場合と入浴用椅子を使用する場合、要介助者が入浴用椅子を使用する場合と入浴用車椅子を使用する場合の必要平面寸法を評価している。評価は入浴基本行為の動作が普通に行うための必要寸法を導いている。立位でのシャワー浴から、椅子座位の要介助者への介助者による洗体までの必要平面寸法を導くことで、浴槽レス浴室の製品開発や住宅改修時のプランニングに有用である。

028 [実験B] 車椅子使用者が浴槽レス浴室を利用する場合の開口幅と奥行き寸法に関する実験である。介助者が入浴用椅子を操作する場合と、浴室で使用可能な車椅子を自走する場合を想定している。自走の方がやや大きめの寸法になっているが、車椅子の全長が影響しているのだろうか。最後に[実験A]と併せた浴室の改修平面プラン例があり、押入れの幅方向（1間）には全てのケースで納まるが、奥行き方向（半間）からは少し前が出るケースがあることがわかる。

今後、障がいの内容や程度による洗体動作の違いを前提として、洗体機器や車椅子の工夫による空間のコンパクト化や使い勝手向上など、より導入しやすい浴室の開発への設計情報を期待したい。また同時に改修時の設計要件となりうる便器との兼ね合いに対する有効な設計例への検討も期待したい。

【デザイン関連／環境・災害】 030～032

座長：布田 健（国土技術政策総合研究所）

030 本報告は、世界に影響を与える英国のインテリアデザインについて、文献および現地での調査を行なったものである。英国はインテリア関連番組の放映やインテリア関連書籍も数多く発行されインテリアが身近である事や、職業ランキングでも常に上位にあるのがインテリアデザイナーであり、市場規模も15億ポンド以上との説明があった。加えて、自身のインテリアをホームパーティーなどで紹介するなど、住まい手側も積極的にインテリアに関わっている状況との事で、やはりインテリアが身近にある事が伺えた。本報告では英国での状況について詳細な説明があった一方で、タイトルにある「デザインプロセス」についてはあまり言及されてなかったと思われるので、今後の発表に期待したい。

031 アジア太平洋地域のインテリア業界は急速な成長を遂げている一方で、これまで国際基準で統一された資格や専門的な知識の不足により、さまざまな課題に直面してきた。これらを踏まえ、アジア太平洋地域における新たなインテリアデザイナー制度として、「AP-ID-AP」認定プログラムが整備され、本報告では、その背景、目的、重要性について情報を整理し、インテリアデザイン業界における資格の標準化と、専門基準の向上における役割について、その意義や展望を明確にした。会場からは、「さまざまな課題」の具体的な例について、どのような事があったかといった問いがあり、図面と違うデザインで仕上げられたり、性能を満たしていない仕様となっていたりするなど、本当に様々であるとの答えであった。今後、資格の標準化や専門基準の向上を踏まえた上で、各国の特徴や多様性を活かした制度となる事を期待したい。

032 次世代の子ども達に戦争の実態や情報を伝えていく事は、自分達の世代の務めだという問題意識から、戦争を描いた絵本を「A リアルな現実の戦争」「B 抽象化したイメージ上の戦争」「C 生活と環境の破壊」「D 難民の生活の侵害と危機」の4つに分類し、その傾向を探っている。発表者も戦争というテーマを本学会で発表する事に戸惑いがあったようだが、戦争が「生活」や「環境」に大きく影響する事を考えると、十分、インテリア学の範疇であると感じた。まとめでは、「戦争を防ぐのは至難の業、そこから何を学ぶかが重要。」と語っており、そのためには、①争いは双方に言い分があり ②原因や経緯を隠さず世界に問い ③問題回避まで時間をかけて話しあう ④負の遺産を次世代に受け継ぐ 事が大

切だと論じている。平和のためには幼い頃からの教育が大切で、理解しやすい絵本は、子ども達に、戦争の悲惨さを伝える大役を担っていると感じた。

■令和6年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長 松崎 元（千葉工業大学）

今年度は、6月22日に第1回理事会・評議員会、総会の運営、11月10日には大会期間中に第2回理事会を開催しました。総務委員会としては、5月14日に第1回、8月5日に第2回、11月6日に第3回を開催し、2025年の3月中には第4回の委員会開催を予定しています。議題は、事務局関連、規程の制定・見直し、支部・部会関連、学会の運営と活性化に関わる内容など、多岐にわたります。オンライン会議システムの活用によりミーティングの機会は比較的多く得られますが、自身の事前準備や会議運営には反省点も多く、会長・副会長をはじめ、直井顧問、委員の皆さまのご尽力のおかげで委員会として成り立っております。次年度は総務委員長4年目に入りますが、皆さまの活動を推進する支えとなるよう、会議運営を進めてまいります。総務委員会の活動状況は、学会ホームページ→運営部門→総務委員会のページに掲載しておりますが、総務委員会へのお問い合わせは、jasis.somu@gmail.com までお願いいたします。

■運営部門だより

□運営部門

運営部門長 上野義雪（副会長）

直井英雄名誉会長・顧問が会長就任中に、副会長3名の役割として、学会組織図における運営部門、研究部門、支部部門の3部門において、各部門の担当者として、部門における学会活動の把握や活動の活性化、活動に対する進言などを担うことになり、上野は運営部門を担当することになった。運営部門の傘下には、国際委員会、論文審査委員会、広報委員会、表彰委員会、デジタル化推進委員会が組織されている。このうち、学会活動の普及啓発に重要な役割を担う広報委員会のオブザーバーとして参加している。広報委員会の任務は、会報の発行、ホームページの維持管理、Zoomによるオンライン会議・講演システムの管理などである。学会活動を中立的立場で客観的に把握し、正しい情報をいかに早く、確実に伝えるかが広報委員会に求められる。換言すれば、広報委員会は学会活動を限なく把握する重要な意味をもつこと

になる。幸いにして、広報委員の皆様のご協力により、少しずつではあるが学会の進むべき方向に舵取りをしながら情報発信を進めておられる現状に、心より感謝を申し上げます。

□国際委員会

特に報告はありません。

□論文審査委員会

委員長 村井裕樹（日本福祉大学）

論文報告集第35号については、昨年9月30日の締め切りまでに応募のあった合計23編の論文と報告についての査読作業等が完了し、3月末に発行される予定です。応募いただいた会員の方々、査読にご協力いただいている多くの方々に御礼申し上げます。アジア地域のインテリア系の学会論文集AIDIA Journalについては、今年度も発行されませんでした。

また、本年度は、論文報告集募集規定の改正を行い、よりわかりやすい内容としました。さらに、2025年度からの論文報告集の投稿は、これまでのメールによる論文審査委員会への送信から、日本インテリア学会ホームページ上の投稿サイトへのウェブ投稿へと変更になります。現在はテスト投稿のチェックを行っているところです。

今後とも、会員の皆様と一緒に日本インテリア学会の発信力を高めていきたいと考えております。つきましては、引き続き会員の皆様のご理解とご協力をお願い致します。

□広報委員会

委員長 棒田邦夫（金沢学院大学名誉教授）

広報は、学会の円滑な運営をサポートする活動・啓蒙・勧誘等に関わっています。その役割を満たすためにこれまでの“会報”に加え“ホームページ”と“Zoom会議”の管理も行っております。これまで以上に会員のための便宜が図られるようになっております。

例えば、新ホームページになったことで大会開催日程・大会プログラムがスマホでも確認できるようになりましたし、Zoom取得ができたことで時間を気にせず遠隔地の会員同士のコミュニケーションができるようになりました。ただし、Zoomについては利用頻度・使用規約確認のため限定利用としておりますが、確認後は運用規定に従って会員相互のコミュニケーションツールに使っていただけます。

運用規定、予約申請・運用（開催）手順についてはインテリア学会ホームページ 広報委員会のページをご確認ください。

一方“会報”では速報性としての役割は下がりますが、情報を残すことができます。「あっ！ええ～？あれっあれ……何だったかな？あっ、確か会報第50号に

……」と知りたい事柄を見つけることができます。デジタルでは残せませんし、見ることもできません。今後は「インテリアの学会情報誌」として残る“辞書”“辞典”。残すことでファッションのように昔流行したものが、今の流行となって学問の幅、深さを知る会報といたく考えています。皆様の掲載アイデアをぜひお聞かせください。

アイデア投稿メールアドレス：

jasis.kohoiinkai@gmail.com

広報では、仲間を求めています。学会の顔をつくる会と思って一緒に学会を盛り上げるアイデアを出し合いませんか。次年度（4月～）より定期的（2ヶ月に1回）に委員会をZoomで行うこととしました。日時は、すべて土曜日17：00～18：00となっています。

□表彰委員会

委員長 高月純子（女子美術大学）

2024年度の表彰委員会の活動は富山大学高岡キャンパスにて開催された第36回大会での学生論文発表の審査準備と表彰、第31回卒業作品展のWEB展示の実施と賞の表彰を行いました。論文発表をされた学生の皆様、作品展に出席された卒業生の皆様、ご協力いただいた教育機関のご担当者様に厚く御礼を申し上げます。

卒業作品展の準備として昨年は約280校の大学、短大、専門学校、高等学校に向けて卒業作品展のご案内をお送りして、47校の教育機関に参加していただきました。「インテリア教育を実施している教育機関」を把握するにあたっては、建築系、家政系、生活系、芸術系も含めて数が多くインテリア教育の範囲も幅広く、加えて学校の学科変更も多く、全ての教育機関を把握するのはとても難しいことです。そのような中、2020年度から卒業作品展をWEB上の展示形式にして広く公開したことによって、今までご案内できていなかった教育機関側から出展希望や、会員になることを検討するご連絡をいただくことも増えて参りました。顕彰に関する業務を通して、学会の活性化と、学生の発表の機会となっていることを感謝と共に嬉しく思います。

卒業作品展WEB展示は公開期間を延長し、現在も引き続きインテリア学会HPにて閲覧が可能です。ご覧頂けましたら幸いです。2025年度も昨年同様、WEB展示を中心に卒業作品展を学会大会時に開催する予定です。ご出展の検討をいただけるようであれば、作品の選抜をして頂きたいお願い申し上げます。ご参考に作品展の準備の流れと、昨年の出展要項の概要を下記にお知らせします。何卒、お含みおきをお願い致します。

1) 作品展の準備の流れ

（本年度）

- ・1月：卒業作品の選抜と保管等のお願い
個人情報・著作権についての承諾書のお願い

〈新年度〉

- ・ 5～6月：作品展の会場と出展要項の詳細決定。
- ・ 6月末：学校担当者宛てに出展要項の詳細のご案内。
- ・ 7月末：出品登録票と承諾書の提出の締め切り
- ・ 8月末：提出作品画像データの提出の締め切り
- ・ 10月中旬：(パネル展示実施の場合パネル提出の締め切り。)
- ・ 11月：大会開催日に卒業作品展のWEB公開。
- ・ 11月：大会閉会式に受賞作品の発表。

2) 昨年の要項の概要

- ・ 出品料はございません。
- ・ 選抜の人数は1学校1作品の推薦をお願いします。
- ・ [2025年3月卒業予定]の学生の卒業作品の推薦。
- ・ 作品(画像)の数は1～5点まで。
- ・ 画像はWEB用にサイズ調整したデータで提出例：1,920×1,080px、1画像1MB以下、JPG)。
- ・ 個人情報・著作権について制作者と指導教員から承諾書にサインを頂くことになりました。

*2025年度の出展要項の詳細は6月末にメール、学会HPでご案内する予定です。

3) お願い

年度が変わり、作品展の連絡窓口の担当者の変更・ご退職に伴う【引き継ぎ等】がある場合は、新しい担当者のお名前・メールアドレスをお知らせお願いいたします。

今後とも表彰委員会ではインテリアを学ぶ学生の支援、インテリア学会の活動が知られる機会を広めるために努めたいと思います。引き続き皆様のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

□デジタル化推進委員会

委員長 井上 徹 (芦屋大学)

デジタル化推進委員会では、論文審査委員会と共同で論文のアーカイブ化を継続的に実施できる体制を構築いたしました。(毎年2月末日に前年度分の論文を公開予定)

また、本学会のデジタル化に関するご相談など下記のメールにお送り頂ければ、委員会内で検討したいと思いますのでお気軽にご連絡ください。

メールアドレス：dx.jasis@gmail.com

次年度も会員の皆さまがより活動しやすい環境になるように努めてまいります。

今度ともご支援・ご協力のほどお願い申し上げます。

■令和6年度研究部門だより

□研究部門

研究部門長 渡邊秀俊 (文化学園大学・副会長)

一つの研究を長期的な活動としてとらえると、研究には新規性、継続性、普及性の3つ役割があると思います。研究に求められる新規性は、その時代の社会が抱える課題に応じて異なります。また、研究は継続して実施されることにより、より普遍性の高い知見になります。そして、それらの知見は学会やメディア等で公表されることにより、一般社会に浸透し、やがては社会に共有される常識として普及していきます。こう考えると、学会はこれら3つの役割を担っている場であるように思います。

一方、研究は人によってなされる営みであるにとらえると、学会は研究者自身を成長させる場であるともいえるでしょう。学会の大会には、インテリアという共通の関心のもと異なる分野の研究者が集います。自分とは異なる分野の研究技法を知ること、己の分野の固定化した研究技法を相対化して見直す契機になります。また、学会の大会懇親会等で若い研究者と熟練の研究者が交流することは、インテリア研究に伝承と発展をもたらすことでしょう。

以上、本学会の研究活動が担っている役割には、さまざまな局面があります。本学会の研究活動が時代の変化に柔軟に対応しながら、継続的に発展していくことを願っています。

□歴史研究部会

部会長 清水隆宏 (愛知工業大学)

学会で準備いただいたZoomアカウントを使用して、歴史研究部会を開こうと思いつつ、なかなか開催ができていません。日々の慌ただしさを言い訳にせず、部会本来の役割を果たしていこうと考えています。

私の個人的な活動報告ですが、昨夏香川県高松市で「沈みゆく船からの手紙」と題した展覧会を開催しました。丹下健三による設計で1964年に竣工した旧香川県立体育館(通称、船の体育館)の意匠図や構造図、竣工当時の古写真などの展示を行いました。その目的は県民の方々に建物の魅力を知っていただき、古くなっても適切に改修し、元の機能を変えてでも可能な限り建物を使い続けようとの気運を高めることでした。新体育館の開館を迎え、貴重なモダニズム建築が岐路に立たされています。

一方、建築よりもインテリアの方がはるかに速いスピードで更新・改装されていると思います。インテリアについても文化財としての評価基準を定め、保存・活用していく、オリジナルのインテリア空間を継承していく

ことが必要な場合もあるのではないのでしょうか。そんな課題についても今後考えていきたいと思えます。

□人間工学研究部会

部会長 白石光昭

本部会の活動がここ数年滞っており、お詫びいたします。今年は研究会を開催予定でいます。今後、会報等を通じてお知らせする予定です。

なお、従前からお願いしておりますが、会員の皆様から活動内容のご希望があれば、ご連絡下さい。また、活動の範囲ですが、部会名称にある人間工学だけでなく、内容を拡大して考えていきたいと考えていますので、例えば感性工学、環境工学、心理学等の研究内容に関心がある方もぜひご連絡下さい。お待ちしております。

また、本部会の活動に参加してみたいとお考えの方がおられれば、ご連絡ください。お待ちしております。

(連絡先：shiro150301@ 以下はgmailとなります。)

□教育研究部会

委員長 金子裕行 (千葉県立市川工業高等学校)

特に報告はありません。

□期限付き研究部会

部会長 渡邊秀俊 (文化学園大学)

期限付き研究部会は、今の時代に適した研究や基盤と基礎的な研究等を目的として、毎年、公募により設置される時限付きの研究部会です。設置期間は当該年度12月から翌年度3月までの1年半弱です。活動終了後には、報告書が学会に提出され、その成果は大会梗概集または論文報告集において報告されます。

令和6年度の期限付き研究部会には1件の応募があり、審査の結果、『様式史からモダンデザインへ継承された椅子の機能・役割とその背景に関する研究部会、代表：黒田智子 (武庫川女子大学)』が採択されました。

公募要領と設置申請書は、毎年7月にご案内させていただいています(申請締切は10月31日)。毎年、2~3部会で合計10~15万円程度の予算を予定していますので、多くの会員の皆様からの申請をお待ちしています。既に活動を終了した期限付き研究部会の成果報告書等は、学会ホームページに掲載されていますのでご覧ください。

■令和6年度支部部門だより

□支部部門

支部部門長 片山勢津子 (副会長)

昨年より、全国の支部の状況を共有し、交流を深めることを目的に「支部長会議」をWeb形式で開催しています。この会議では、各支部の現状報告を基に、自由な意見交換を通じて課題解決や新たな活動アイデアを模索しています。始まりは2月。それから季節毎ということで、5月、8月に行い、大会理事会がある11月は見送り、計3回の支部長会議を行いました。会のメンバーは、学会長と支部長8名、そして支部担当副会長の片山です。

これまでに、他支部の取り組みを参考にしたイベント企画や、支部の垣根を越えた交流などの動きが見られています。見学会を通じた他支部との交流も始まりました。12月には東海支部の見学旅行で、中国四国支部の皆様と交流する機会がありました。私も誘っていただいて参加し、大変有意義な経験ができました。特に、他支部の女性と4名で語りあえた交流会は、楽しい思い出です。

「インテリア」という共通の目標を持つ私たちだからこそ、大会だけでなく交流が広がることで、学会がより活性化すると期待しています。ぜひ皆様のご意見やアイデアをお寄せください。引き続き、会員の皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

□北海道支部

支部長 小澤 武 (小澤建築研究所)

何号か未投稿のままに過ごし、心苦しく思っています。

かと言って私事を書き連ねるのも……とは思うものの、支部の未来を思い、出来ることを少しずつ積み重ねていきたいと思います。

ということで、小澤建築研究室で進行中のプロジェクトにおける広葉樹造作材の調達についてお知らせします。

尚、'18会報No. 62、'21同No. 68の支部コメントを参照されると、当プロジェクトがtimelessかつ、その道の専門家との繋がりの中で成り立っていることが想像できるのではないのでしょうか。

大沼だんごの「沼の家」—創業1905年—は'92に私が改築に携わり、現3代目より次世代への承継をテーマに、帳場(headquarters)のリフォーム・デザインを依頼されました。

'22.11月 打合せスタート、数回のプレゼンと修正を経て'24.6月 予算・デザインが決定しました。現場は今春着工に向け、用材の調達は完了、キッチンは制作中です。

ここに「栓」で統一した広葉樹材の諸元を下記に。

- ・キッチン—D700/600X L2.700X H900—面材
但し、天板—厚5mmSUS304 パーマネント（バイブレーション）加工
- ・アイランドカウンター（パントリー）天板用スラブ材—D750X L2.700（2枚接ぎ）—及びベースキャビネット面材
- ・クロゼット扉 面材、但しキャビネット本体は既存転用
W800X H1.140—2枚 W800X H840—4枚 W800X H750—6枚
W800X H450—2枚 及び補足材・内法材
- ・ペリメータゾーンのデスクカウンター天板用スラブ材—D570X L4.650（4枚接ぎ）
- ・店舗を望むガラススクリーンに添うワークカウンター天板用スラブ材—D720X L2.700（2枚接ぎ）—及びベースキャビネット面材
- ・引違い戸（W1.200X H2.550—4枚建）の框・棧・鏡板材

以上K.D.（人工乾燥）材調達量計、面材用約1.8m³、天板・框・棧材用約1m³を私の在庫を含め2年をかけて木取り・調達しました。

工務店、各職方の業態が変わっていく中、デザイン・質を達成しようと考え、直営に近い発注形態を模索するプロジェクトが、私の事務所では増えてきています。

□東北支部

支部長 市岡綾子（日本大学）

今年度は3月12日にweb開催による総会のみ活動となりました。11月の学会大会に東北支部会員及び関係者の参加が少なかったことにも現れておりますが、福島・山形・仙台・盛岡そして益子と、会員活動場所が広域にわたることは、支部活動の活性化を難しくしている要因の一つと考えられます。難しい課題ではありますが、新規会員を増やす努力を意識し、地道な支部活動を目指す所存です。なお、今年度の総会後のイベントは、ここ数年開催していた講演会に替わり、お互いの近況報告を行い、次年度以降に向けた会員同士の懇親を深める機会とする所存です。広域であるがゆえに対面が難しい東北支部の特性に、オンライン活用が上手く合致すると考えておりますので、多くの支部会員や関係者、さらには他支部会員が参加できる機会を企画し、インテリアを介した交流の場づくりに務めることができると存じます。東北支部を温かく見守っていただけましたら幸いです。

□関東支部

支部長 高柳英明（東京都市大学）

今年度後半も活発な支部活動を行った。ほぼ毎月定例の幹事会に加え、関東支部主催セミナーを2回催した。1回目は2024年6月29日（土）「多様な価値基準と呼応

するインテリアデザイン—インテリアと睡眠—」であり、座学セミナー形式にて参加者50名程度、2回目は「英国式ムードボードを用いたインテリアデザインの提携業務の提案」として、関東支部幹事・StudioMa主催の安藤眞代先生にご講演頂き、支部会員の他学生・一般客含め参加者70名にて盛況であった。2025年度は関東大会であり、目下その準備に追われていますが、遠方からお越しの大会参加者様にもご満足頂けるよう、よい運営を心がけて存じます。

□東海支部

支部長 中井孝幸（愛知工業大学）

対面式とオンラインのハイブリットにて、2024年9月26日に第4回支部役員会（11名参加）、2025年1月14日に第5回支部役員会（11名参加）を開催しました。

2024年12月14日～15日に、中国・四国支部との見学会及び懇親会（東海支部8名（うち1名は見学会のみ）、関西支部1名、中国・四国支部5名の計14名参加）を実施しました。14日は下瀬美術館で学芸員さんから丁寧な説明を受け、15日は中国・四国支部の谷川先生に尾道の街中をご案内して頂くなど、充実した見学会となりました。今後もこうした支部間の交流を、続けたいと思います。

□北陸支部

支部長 長山信一（富山大学名誉教授）

令和6年度の重要課題は、日本インテリア学会（JASIS）第36回大会（北陸・高岡）の北陸支部開催でした。一月より毎月実行委員会を開催し、9回の実行委員会と1回の支部総会を開催して、大会開催に漕ぎ着けました。

JASIS 第36回大会（北陸・高岡）は、2024年11月9日（土）・10日（日）に富山大学芸術文化学部（高岡キャンパス）で開催しました。コロナに配慮し、昨年同様の対面開催を基軸に、作品展はWeb開催としました。一般的に学会は「見学会・研究交流懇親会・研究発表会・講演会」のフル・スペック大会開催は、少なく成って来ているとの事ですが、学会活動を重視する私達にとって、知恵を絞って行うことは、大切だと考えています。尚、今回のJASIS第36回大会（北陸・高岡）が無事開催できたのは、学会長を初めとするご参加頂いた学会員・役員の皆様のご理解とご協力の賜物であると感謝しています。

令和6年度末の最終イベントは、2025年2月11日（火）〈建国記念日〉に、高岡市美術館と富山大学高岡キャンパスで開催される、富山大学芸術文化学部の卒業制作展見学会とWebでJIDA理事長の太刀川英輔氏特別講演会（2H）視聴の後、交流会を開催する予定です。最後に北陸支部会員各位のご協力とご努力に感謝します。

□関西支部

支部長 中村孝之（生活空間研究室）

今年度は、注目されている木質空間に関わる見学会として、日本インテリアプランナー協会関西との共催により、グランフロント大阪のリニューアルした無印良品施設で、良品計画の空間設計や木材資源の有効利用についての講演と見学会を行いました。

続いて12月には見学と講演・体験を組み合わせたイベントとして、日本ナショナルトラストの案内による近代木造住宅の黎明期に建てられたW.M. ヴォーリズ設計の駒井家住宅の見学と、正会員である京都大学大学院農学研究科教授／仲村匡司先生による、木質空間がヒトの心身に及ぼす影響に関するVR等を用いた研究の講演及び体験を実施しました。

今年に入り1月25日に、大阪梅田に新たに街開きしたグラングリーン大阪で新年会を実施し、3月1日には恒例となった関西のインテリア・生活系の学生による研究発表会をオンラインで実施します。学会ホームページに案内がありますので皆様ご参加ください。



駒井家住宅



京都大学農学部研究室

□中国・四国支部

支部長 谷川大輔（近畿大学）

中国・四国支部では、2024年11月14日（金）に、広島市内の居酒屋 かめ福におきまして日本インテリア学会東海支部の皆様と懇親会を行い、また翌日11月15日（土）は、東海支部の皆様を尾道をご案内致しました。懇親会では、東海支部7名、関西支部1名（片山先生）、中国四国支部6名の方が参加され、楽しく交流を行いました。また尾道では、尾道駅からU2、ガクディハウス、商店街、あなごのねどこ、志賀直哉旧居、LOG、千光寺、千光寺頂上展望台PEAKなどの見学会を行いました。大変有意義な支部間の交流ができました。詳しくは、東海支部の部分をご覧ください。」

また本年も、2024年11月16日、17日に岡山県天神山文化プラザ（第2展示室）でJCD（一般社団法人 日本商環境デザイン協会）中国支部主催により行われた「19th. JCD中国支部デザインデイズ IN 岡山」に学生が参加しました。テーマは「繋ぐ」。2日間にわたり学生コンペティションが行われ、岡山大学、岡山理科大学、岡山県立大学、安田女子大学、広島女学院大学、広島工業大学の学生が参加し、「繋ぐ」デザインについて考え、議論され、デザインリーグ賞が決められた。

□九州支部

支部長 近藤正一（日本文理大学）

家具デザインコンペ

昨年度に引き続き、大分県インテリア設計士協会主催による家具デザインコンペの後援に加わりました。今年度のテーマは「かわいい家具」です。時代の変化の中で、言葉の意味も揺らぎ移ろいゆく中、広く共感が得られる“かわいい”とはどのようなものなのかを考えていただく主旨で開催し、応募者総数はちょうど100名となりました。最優秀賞は、熊本デザイン専門学校 建築・インテリアデザイン 2年 森 万利与さんの「ここごろん」でした。九州でインテリアデザインを志す若者を、これからも継続的に応援していく所存です。



その他、講演会や展示会など

支部会員の関連する活動については、順次、ウェブサイトに掲載して参ります。

- ・2025年2月12～14日開催「高橋研究室卒業設計作品展」
- ・2025年2月9・11日・15～16日開催「日本文理大学建築学科作品展」
- ・2024年10月5日開催「熊本県立大学公開講演会「三木順子氏講演会」
- ・2024年5月18日開催「光浦高史氏講演会「土地の力を呼び起こす空間づくり」(後援事業)

■事務局より

事務局長 棒田邦夫 (金沢学院大学名誉教授)

年度の締め1、2、3月事務局の一番忙しい時期です。毎年この時期になると収入・支出計算に終われるのですが、中でも一番頭を悩ますのが未納会員への催促請求です。未納会員の方々は“わざと渋っている”とは思っていないのですが、私のように“銀行へ行こう、行こうと思いつつながら目先の仕事に追われ”気がつくにつれ日が経ち、銀行に向かうタイミングを失い“忘れてる”のか

もしれません。人のことを言えない私が「早く年会費振り込んでください！」と振込みの催促することがまるで“借金とり”みたいで気が引けて筆・キーボードが進みません。どうか催促請求ってしたくありません。善意の対応お願いいたします。

学会は会員の年会費という善意によって運営されています。どうか年会費振込み遅くとも年内12月までにはお願いいたします。そして年度の収支がスムーズにまとめられるようご協力ください。

なお、数年前からはゆうちょ銀行に加え、みずほ銀行からも振込みができるようにしております。近年Web登録をすればわざわざ銀行に行かなくてもパソコン、スマホから振込みができますようです。振込み手数料も同じ銀行同士であれば無料ですし、他銀行の場合でも窓口手数料の半額ですみます。なお、みずほ銀行でのお振込の場合(会員名)がわかるようにお願いします。

どうかご協力のほどよろしくをお願いいたします。

最後に下記名の方がどなたであるかお教えてください。会員名簿にも無く入金者がどなたか困っております。

みずほ銀行 [24--3-16 振込 シユワーベ ユミ?(フミ?)]

メールアドレス: jasis.jimukyoku@gmail.com

電話番号: 080-2386-5652

今後とも学会運営にご協力のほどよろしく申し上げます。

■編集後記

広報委員 棒田邦夫 (金沢学院大学名誉教授)

会報春号をお届けします。執筆時、金沢は東北ほどの積雪ではなかったですが、すごく寒かったです。「年のせいなのかなあ？」とも思いましたが、隣に住む息子夫婦の家で孫を抱っこしていると暑くて下着がびっしょりでしたので、「あつ！年ではなく若さに関係なく皆寒いんだ！」と自画自讃してしまいました。

雪といえば北海道支部、東北支部、北陸支部(新潟県)、中国四国支部(鳥取、松江近郊)会員の皆様は辛い日々を送られたかと存じます。毎日の雪すかしほど身体に伝えるものではありません。同じ雪国の者として気にかけております。3月に入れば暖かい日も続きますので、地元の温泉に入って、お身体をお大事にしてください。

新しい年が始まります。お米の高騰、物価の高騰、資

材の高騰と続いており、苦しい台所事情が続きますが、日本インテリア学会は皆で知恵を出し合って苦しいけれども有意義で、楽しく、前を向いて発展していくことを望んで止みません。

■日本インテリア学会会報第75号 (2025. 3. 28発行)

編集者: 棒田邦夫 (委員長)

発行者: 横山勝樹 (日本インテリア学会会長)

広報委員会: 上野友輝、角田静香、笹原理介
清水隆宏、白鳥洋子、仲谷剛史
元川鳴子

■事務局

日本インテリア学会 事務局 村尾温子、棒田邦夫

〒920-0941 石川県金沢市旭町1-25-25

電話: 080-2386-5652

e-mail: jimukyoku@jasis-interior.jp